The International Asociation for Integration, Dignity, and Economic Advancement

IDEAジャパン ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、すべての人々の尊厳の確立を目指して

2008年 11月20日発行 6号

日々の活動の中で

理事長　　森元　美代治

＜ご逝去を悼む＞

理事の国本衛さんが３月21日、こつ然とわれわれの前から姿を消してしまわれました。胸の痛みを訴えて３月17日に入院し、その４日後に胸部大動脈破裂により不帰の人となってしまいました。国本さんらしい最期だったのですが、あまりに突然のことゆえ信じがたいほどでした。

国本さんは、ハンセン病国賠訴訟の原告団事務局長として勝訴に導いた中心人物だったのです。胃の摘出手術、C型肝炎、肝硬変、心臓病等、病魔と向き合いながら「闘う人は幸い……」と、自己叱咤しつつ、精力的に働いておられました。

全生園祭りのIDEAジャパンのバザーに、京都から同志社女子高の生徒さんが駆けつけた。今年で8年目になる。中国のハンセン病の村でボランティア活動をするチャオ（橋）の学生さんたちも参加し、賑やかなバザーになった。／08年11月3日

５月10・11日、東京で開かれた第４回ハンセン病市民学会の実行委員長として、開会式で読み上げる予定の挨拶文までパソコンに入力していたことを知って、国本さんの、市民学会を成功させようとする意気込みと用意周到さに、ただ脱帽するばかりでした。市民学会当日は、全国各地から1400人もの人々が結集しましたが、せめて“男の花道”としてその大舞台に立って、凱旋して欲しかったと思ったのは、私一人ではなかったでしょう。

国本さんは早くから多磨全生園の将来構想について論文を発表し、「国際ハンセン病医療センター」構想を提言しておりました。国際感覚も並ではなく、IDEAジャパン設立当初から理事としてご尽力くださいました。

若い頃から詩の同人をつくり、文学青年としても知られていた一方、入所者自治会では、施設整備担当者として勤務し、現在の全生園を形づくった功労者の一人です。『生きて、ふたたび』（毎日新聞社刊）『生きる日、燃ゆる日』（同社刊）などのエッセイも出版されております。ご一読ください。

11月７日、IDEAジャパンにとってかけがえのない筑紫哲也さんの訃報を聞いたときも、衝撃を受けました。IDEAジャパンを立ち上げるとき、快く推薦人を引き受けてくださったのです。

筑紫さんは記者時代からハンセン病問題に深く係わり、マス・メデイアでは最大の理解者のお一人でした。ハンセン病国賠訴訟に対し、政府が控訴か否かの瀬戸際にあった２００１年５月２２、２３の両日、多数の原告たちをニュース２３に出演させ涙ながらの訴えをさせてくださいました。そして政府を控訴断念に追い込み、あの歴史的瞬間を迎えたのです。筑紫さんはわれわれハンセン病当事者の人権を回復させ、生きる希望と勇気と力を与えてくれました。

世界を繋ぐ偉大な国際人を失い、、、誠に残念のきわみです。慎んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

＜ハンセン病問題基本法の制定＞

全国13カ所の国立ハンセン病療養所と、２カ所の私立療養所に暮らす在園者は2700人を切り、平均年齢は80歳。わが国では新規患者の発生は０となり、患者減による医師不足はどこの園でも深刻な問題です。看護・介護要員も減らされる一方で、在園者の最大の不安は、自分たちの最期を誰がどのように看取ってくれるか、ということです。家族とは断絶したままです。国は敗訴した結果、「最期の一人まで、現在の療養所で面倒をみる」という在園保障を確約しておきながら、統廃合を目論んでいます。

それを拒絶するためには、療養所の入所者をハンセン病病歴者だけに限定している現在の法制度を改め、新しく療養所の生き残り策を樹立しなければなりませんでした。そこで「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律（ハンセン病問題基本法）」の制定が不可欠だったのです。現在の療養所で、ハンセン病以外の他の疾病治療や老人医療等も可能にし、広く国民健康保険制度が適用され、地域社会に開かれた医療機関として恒久的に存続させるのがその狙いです。

93万人強の皆様の貴重な署名を盾に、基本法制定運動を展開してきましたが、６月11日、衆議院本会議において、この基本法が「平成20年法律第82号」として可決されました。IDEAジャパンを通して署名運動にご協力いただいた多数の皆様に厚く御礼申し上げます。今後はそれぞれの療養所の地域性や特質を活かした独自の生き残り策を、地方自治体や地域住民と話し合いながら摸索していくことになります。

＜ハンセン病と中国＞

北京オリンピック委員会は、「オリンピック期間中、テロリスト、テロの恐れのある者、性感染症患者（HIV、エイズ）、精神障害者、開放性結核患者、ハンセン病患者等は入国を認めない」という前代未聞の声明を発表しました。このニュースを知った「ハンセン病ふるさとネットワーク富山」は、北京オリンピック委員会に抗議しました。IDEAジャパンは、IDEAインターナショナルにこの問題を通知すると同時に、国内ではネットワーク富山、全療協、全原協、ハンセン病弁護団、ハンセン病市民学会、他の疾病患者団体と合同で、中国大使館を通して、中国政府や北京オリンピック委員会に撤回を求めて要請しましたが、回答は得られませんでした。

IDEAインターナショナルは、北京オリンピックをハンセン病への偏見・差別意識を改革する絶好の機会ととらえ、IDEA中国（HANDA）を中心に、時間をかけて、中国政府に対して、正しい知識の普及と啓発活動を始めることにしました。

ところが、開会式間近になって、「ハンセン病問題の最終解決を進める国会議員懇談会」会長の藤井祐久議員の政府レベルでの申し入れに対して、「ハンセン病患者

バザーの店の前で、タンゴの名曲をハーモニカ演奏する、
森元さんの友人、高橋勝さん（中央）／08年11月３日

だけは、この声明から外す」という回答がありました。もちろん全く納得できない回答でした。

1998 年、北京で第 14 回国際ハンセン病学会が開催された際、北京空港でエチオピアの快復者代表だけが、人目につく後遺症のために入国拒否されるという出来事がありました。付き添ってきたドクターたちが入国審査官に抗議し、説明して、なんとか治まって、エチオピア代表は入国できましたが、10 年前とほとんど変わっていない中国のハンセン病に対する偏見、差別感に失望するばかりでした。

さて、今年の８月 21 日から 25 日まで広東省広州市で行われた JIA(家)-日本・韓国・中国学生ハンセン病ボランティアネットワーク５周年大会に参加しました。詳しい報告は次号のニュースレターでしたいと思いますが、現地の学生たちに今回の中国政府のハンセン病患者等の入国拒否問題について聞いてみたところ、彼らもこの報道に驚き、憤慨していました。抗議などのアクションを起こしたのかという質問に対しては、「そんなことをしたら、JIA の活動そのものが止められてしまうから、できない」とのことでした。

広州市では街頭でオリンピックを見ている人だかりはほとんどなく、たまたま 24 日の閉会式の模様を放映していたテレビを、ホテルのロビーで見ていたのはわれわれ日本人３人とホテルの従業員２、３人だけでした。出入りする人々は、華美ともいえる北京オリンピックは、一部の金持ちのお祭り騒ぎぐらいにしか見ていないようでした。

＜ハンセン病とインド＞

北京オリンピックが終わって間もなく、びっくりするニュースが伝わってきました。インド最高裁が「ハンセン病患者が自治体選挙に立候補したり、自治体に就職することを禁じた、インド東部のオリッサ州自治体法は合法」とする下級審の判決を支持する決定をしたというのです。この裁判は、2003 年に州議会選に当選したのに、ハンセン病を理由に当選無効とされた快復者が起こしたものです。

今年６月に国連人権委員会で「ハンセン病差別撤廃決議」がインドを含めて全会一致で採択されたばかりです。私たちはハンセン病の偏見・差別を解消するため、さらに地道に啓発活動を続けなければならないと、決意を新たにしました。

五行歌

山内　きみ江

幼い日
サイレンに
脅えて逃げた
炎天下
戦争体験

敗戦日
泣いている大人
今で分かる心情
愚かな戦争
命は宝

夏休み返上
勝利を
目指し
炎天下
球児たち

老いの身
涼しさを
しのぐ夕べ
線香花火に
釣忍

韓国訪問　**笑顔に迎えられて**

事務局長　村上絢子

イ・ヘンシムさん　服装や部屋の様子から生活に
ゆとりが感じられる（08年10月）

カン・ウソクさん　私たちを笑顔で迎えてくれた
（写真上／08年10月）　写真下は04年1月撮影

秋も深まりつつある10月末、韓国の知人たちを訪ねて、ソロクト療養所とソウルへプライベートな旅行をしてきました。釜山から4時間半バスに乗って、ソロクトの向かいにある港町、鹿洞に到着しました。そこで、通訳のTさんと待ち合わせました。Tさんは、大学で韓国の人権問題を研究している日本人女性です。

ちょうど日曜日だったせいか、鹿洞からソロクトへのフェリーは観光客でいっぱいでした。驚いている私にTさんが言うには、ソロクトは若いカップルのデートスポットになっているのだそうです。また風光明媚なソロクトは、家族連れでも楽しめる観光の穴場でもあるようです。

まず、昨年の9月、10月に相次いで亡くなった金新芽さんご夫妻のお墓参りに行きました。金新芽さんについては、IDEAジャパンのニュースレター5号に紹介しましたが、ハンセン病に関わっている、多くの日本人ボランティアに慕われ、精神的な支えになっていた方です。日本の療養所に隔離され、後に韓国へ帰国した人たちにも補償金が支給されるよう、金泰九さん（長島愛生園）と尽力した他、ソロクト裁判では韓国の原告にも平等の補償を求める署名を呼びかけたことを覚えている方もいらっしゃるでしょう。

丘の中腹にある納骨堂に、金新芽さんご夫妻のお骨は納められていました。日本の骨壺とは違って、木箱です。だれの心遣いなのか、箱の表面にご夫妻の写真が貼ってあったので、すぐに見分けがつきました。10年間、木箱に納めたあと、他の死者と一緒に土まんじゅうのお墓に移して、土に還すのだそうです。

キリスト教と音楽を生活の柱として、養鶏、養豚、農業によって自立して生きてゆくために忠光農園（定着村）

を設立して、子弟教育に心を注いだ金新芽さんでしたが、心ならずもソロクトで最期を迎え、お骨も故郷に帰れない現実に、胸が痛みました。

ソロクト裁判のとき、日本でお会いした韓国人原告の皆さんは、ソロクトでも話を聞かせてくださり、夫（八重樫信之）の写真撮影に応じてくれたので、今回はポートレートが載っている人たちに写真集『絆』を贈呈したいと持参しました。

ドアを開けると、カン・ウソクさんが満面の笑顔で迎えてくれました。裁判期間中は日本でもソロクトでも、いつも険しい表情を変えなかったカン・ウソクさんは、まるで別人のように終始温和なお顔でした。「補償金が支給されたおかげで、食べたいものが食べられるようになった。ありがたい」というのがカンさんの感想でした。

ふき替えられた瓦屋根。慈恵病院の古い建物も建て替えられた（08年10月）

チャン・ギジンさんは、裁判以降、介護してくれる人がいるので、生活面で助かっていると言っていましたが、さすがにお年を召したように感じました。

両手足不自由なイ・ヘンシムさんは、髪をきれいにカットして、こざっぱりとした服装で迎えてくれました。自費で介護人を雇えるようになり、ご主人と二人、同居人に頼って生活しているそうです。

９０歳を超えたお母さんを亡くした金点任さんは、ご主人と二人暮らしになりました。ちょうど近所のオバチャンたちが集まっていて、にぎやかに井戸端会議の最中だったので、ご主人の居場所がありません。補償金を受け取れて、大喜びの様子が伺えました。

その他、訪ねた人たちの服装がこぎれいになり、眼鏡を新調したり、家具やテレビを購入したり、バイクを買えたので町に行かれるようになったとか、家族と行き来できるようになったと、喜んでいる人もいました。

原告と一緒に何度も来日した元自治会長の金明鎬（キム・ミョンホ）さんは、「裁判では弁護士の先生方はじめ、日本人の支援者たちが自費でソロクトまで来て応援してくれたおかげで、日本政府から補償金をもらえました。皆様のご恩は忘れません。感謝しています」とお礼を言われました。

園内では、屋根が葺き換えられ、縁側の床も張り替えられるなど、住居が見違えるほど改善されていました。

ソロクト裁判はもう解決済みだとばかり思い込んでいましたが、まだ約１０人は支給されていないし、受け取る前に亡くなった人もいますので、早急に日本政府が支給決定してしてくれることを待ち望んでいます。

ジャーナリストをめざしていたという通訳のＴさんが、光州なまりを交えながら、家族のように親しげに話すので、入所者の皆さんにとってはまるで親戚の娘が訪ねてきてくれたようで、心置きない会話が弾みます。私たちはいつかソロクトを訪ねて、写真集を直接手渡したいと願っていたのですが、韓国語が堪能なＴさんと出会えたおかげで、皆さんと話ができたし、目的も果たせて、軽やかな気持ちでソロクトを後にしました。

ソウルでは、ソロクトのイ・ヘンシムさんを主人公にしたドキュメンタリー映画『ドンベク・アガシ（椿娘）』をつくった朴貞淑（パク・ジョンスク）さん、プロデューサー、カメラマン、通訳たちの仲間と一緒に、サムゲタンを食べながら話しました。今年の冬、新宿で『ドンベク・アガシ』の上映会をしたときには、IDEAジャパンの皆様にもご協力していただきましたが、うれしいことに、この11月20日から韓国の７都市の一般映画館で上映が決まり、併せて自主上映会もするそうです。どうか成功しますように。

飾り気のない人柄で、物事の本質をつかもうとする朴監督だからこそ、イ・ヘンシムさんが心を開き、一般人が予想もできないような人生を語る気持ちになったのでしょう。『ドンベク・アガシ』には、そんな二人の心の交流が淡々と描かれていました。

私の孫と同年齢の二人のお子さんを育てながら、映画制作に情熱を傾けている朴監督と仲間たちに、日本から応援したいと思っています。

写真・八重樫信之

２００７年度　事業報告

平成 19 年 4 月 1 日から平成 20 年 3 月 31 日まで

１．　事業の成果

（1）ハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業

（2）国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業

（3）ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業

これらの三事業を事業計画として掲げ、取り組みました。

（1）の啓発事業については、①講演、②写真展の開催、③ハンセン病資料館における説明、の三つが主なものでした。

①の講演については、IDEA ジャパンの役員により５４回講演をしましたが、ミュージカルや、映画会開催にも協力しました。

②の写真展については、IDEA ジャパンの八重樫信之理事が撮影した「絆―日本・韓国・台湾のハンセン病」の写真展を台湾と国内で開催しました。

③の国立ハンセン病資料館での説明は、IDEA ジャパンに説明依頼があった団体に対する森元美代治理事長の説明です。

以上の活動を通して、啓発の面で多大な成果を上げました。

（2）の交流・支援事業については、①海外との交流と生活改善資金支給、②奨学金援助、③ハンセン病市民学会参加、インドでの国際ハンセン病学会＆ IDEA 国際集会参加の三つが主なものです。

①については、ハワイの家族会であるオハナの会が 07 年 4 月に来日したときと、07 年 4 月に台湾楽生院を訪問して交流を図るとともに、楽生院退去反対運動の支援、台湾人権集会に参加しました。

②については、中国、インド、タイ、ネパールの学生に奨学金を支給しました。

③については、07 年 5 月に草津で開催されたハンセン病市民学会に理事長、理事、会員多数が参加しました。また 08 年 1 月に、インドのハイデラバードで開催された国際ハンセン病学会＆ IDEA 国集会に理事長、理事、会員が参加し、講演、報告などを行うとともに、各国からの参加者と交流を深めました。

（3）ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業については、① IDEA ジャパンのニュースレター（5 号）、インド特集号の発行と、ホームページの開設、②「論座」（朝日新聞社刊、月刊誌）への記事掲載、③資料提供があります。

①のニュースレター 5 号では、創立 5 周年を迎える IDEA ジャパンへの協力依頼と、森元理事長の故郷訪問記、佐久間建理事の「ハンセン病と教育」の研究報告、故金新芽さんのテレビドキュメンタリ紹介です。インド特集号では、カラー写真でハイデラバードでの会議の様子や交流風景を紹介しました。また念願であったホームページもボランティアの玉田八恵子さんの尽力によってようやく開設され英語の自動翻訳機能付きで見られるようになりました。　http://www.idea-jp.org/

②については、「ハンセン病問題は終わらない」というテーマで、リニューアルした国立ハンセン病資料館や、国賠裁判以後に残された問題点について村上絢子理事の記事と、八重樫信之理事の写真が「論座」に掲載されました。

③については、ニュースレター（5 号とインド特集号）、論座などを会員や関係者に送付しました。

会計報告（２００７年度）

平成 19 年４月１日から平成 20 年３月 31 日まで

＜収入＞

入会金		８人	8,000
年会費	正会員	36 人	180,000
	賛助会員	42 人	84,000
特別賛助会員		４人	80,000
特別正会員		０人	0
寄付金			1,441,500
利息			996
合計			1,794,496

＜支出＞

１　事業費	
（1）啓発事業	450,412
（2）交流・支援事業	1,399,179
（3）情報提供事業	149,227
合計	1,998,818
２　管理費	
給料手当	120,000
消耗品費	5,052
会議費	117,344
通信運搬費	155,210
印刷製本費	119,274
雑費	8,995
合計	525,875

支出合計	1,998,818 ＋ 525,875 ＝ 2,524,693
＜残高＞	1,794,496 － 2,524,693 ＝ － 730,197
＜累計残高＞	－ 730,197 ＋ 2,700,839 ＝ 1,970,642

会費納入のお願い！

皆様には IDEA ジャパンの活動にご理解、ご協力を賜りましてありがとうございます。おかげ様で、この５年間で活動の基礎固めができつつあります。つきましては、今年度分の会費納入をお願い申し上げます。今後とも、よろしくご支援ください。　　理事長　　森元　美代治

＝お 知 ら せ＝

♣ミャンマーで大水害に被災したハンセン病快復者に、並里まさ子先生（おうえんポリクリニック院長、IDEA ジャパン会員）を通して、見舞金 10 万円を贈りました。ミャンマーからお礼のメールが届きました。

♣写真展のご案内　人と人　つながって生きる　−2008 年・映像が伝えるハンセン病−

日時：2008 年 12 月 1 日（月）～ 6 日（土）　10：00 ～ 18：00

場所：ワセダギャラリー　（早稲田大学早稲田キャンパス・大隈講堂向かい）

【同時開催】

♣ハンセン病問題ドキュメンタリー作品上映会

日時　12 月 6 日（土）16：30 ～ 20：00

場所　早稲田大学本部キャンパス 26 号館大隈タワー

地下多目的講義室（ワセダギャラリー隣）

・作品上映（16：30 ～ 19：00）

杜雲翼氏作品・FIWC 関西委員会作品・学生 NGO チャオ作品・杉並区立東原中学校映像作品

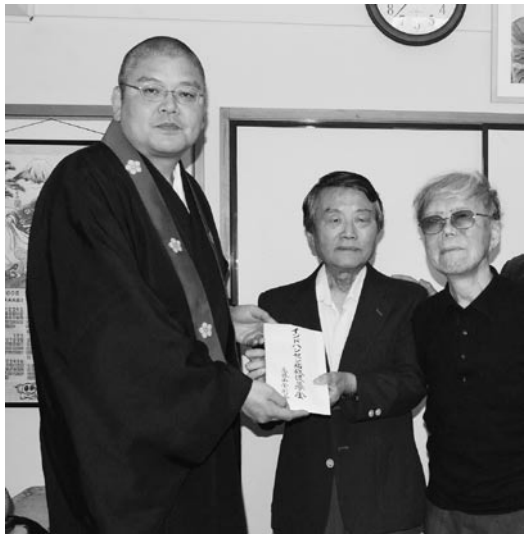
・ミニトーク（19：00 ～ 20：00）

司会　西尾雄志氏（早稲田大学）

コメンテーター　森元美代治氏（IDEA ジャパン理事長）

中山節夫氏（映画監督）予定

薮本雅子氏（元日本テレビアナウンサー）



高幡不動尊様からのご寄付を受け取る森元理事長（中央）と
柴田副理事長（右）／ 08 年 3 月

＝ 感　謝 ＝

♣ 毎年、高幡不動尊様から多額のご寄付を頂戴しています。発展途上国のハンセン病快復者と家族の生活改善資金や、奨学金援助など、有効に使わせていただいております。心から御礼申し上げます。

♣ この８年間、同志社女子高校の生徒さんが資料館と多磨全生園見学を兼ねて、全生園祭に参加して、IDEA ジャパンのバザーを手伝ってくださっています。今年は、チャオの学生さんと一緒に盛り上げてくれました。ありがとうございました。

＝原稿募集＝

会員の皆さんの原稿をお待ちしています。気軽に投稿してください。送り先は下記のアドレス、または FAX へどうぞ！

発行責任者　：森元　美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン
http://www.idea-jp.org/
事務局：
〒 204-0012　東京都清瀬市中清戸 4-847
中清戸 4 丁目アパート 7-605
Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記

オバマ大統領実現の背景には、アメリカを「変えたい」と願う若者の組織力とインターネット利用作戦があったとか。日本のハンセン病 100 年の歴史を変えた国賠裁判の最中、支援者がインターネットでネットワークをつくり、原告の皆さんが携帯電話を使い始めたことを思い出しました。先入観のない若者が関わることで、さらに「変わる」のではないかと期待しています。／村上絢子

E-mail　info@idea-jp.org